

「熊本地震の真ん中に立って見えてきた障害者の実像」 東 俊裕先生

「平等という言葉」

保健医療学専攻看護学分野

16S1056 郷原 志保

東先生のお話はパワーポイントを使われず、聴講している私達と正面に向き合い、一人一人に語りかけるような、熱さが直接胸に染み入ってくるような。

そんな不思議な感覚を覚えながら、お話される内容に聞き入っていた様に思います。

東先生がお話されたエピソードの中で私が特に印象的だったのは、重度自閉症のお子さんを抱えるご家族のお話でした。障害によって、長く連なる配給の列にじっと我慢して並びことが出来ない子供に対して「みんな平等ですから。列に並んでいない方には渡せません」と投げつけられた言葉。私にとって非常に衝撃的でした。平等って何だろう？そんな風に考え、まずは辞書で調べてみました。

“かたよりや差別がなく、みな等しいこと。また、そのさま。”

とありました。「みな等しいこと」その意味を皆、自分に都合の良いように解釈しているのではないかと感じました。

『五体不満足』で有名な乙武洋匡さんは、ある対談でこのようにお話されていました。

“ルールを平等に適用することに縛られてしまって、そもそもの目的から遠のいてしまう。平等を保障するためにルールを作る。でも、そのルールを遵守することに固執してしまうと、本来の目的である平等が保たれなくなる。”

人は誰しも一人一人違って、それは障害のあるなしのみならず、年齢や性別、体格差、能力など、一人一人持っているものは違うはずなのに、なぜ平等という言葉の前では、目の前にある「差」が見えなくなってしまうのでしょうか。それとも災害時には、基準以外のものは切り捨てて良いのだという考えになってしまうのでしょうか。差を埋めるための援助を「特別扱いだ」という人もいるかもしれませんが。私は、「特別」ではなく「普通」であると思います。障害などによって日常生活を送るうえで、ちょっとした工夫が必要な人たちにとって「普通に」生活できるように援助することが「特別」だと言えるのでしょうか。

東日本大震災の日、わたしは病院で看護師をしていました。併設している老人介護施設に倒壊の危険性があり、入居されている高齢者が、病院の広い講堂一箇所に集められ、冷たい床の上に寝かされていたのを今でも鮮明に覚えています。マグロの競りが始まるみたいだ。そんな印象でした。そこには人権や尊厳など存在せず、ただ「モノ」のごとく、ゴロゴロと端から順番に時間毎に体位変換されている姿を見て、災害の本当の恐ろしさを垣間見たように思います。同じ被災者なのに、なぜこのような扱いを受けているのか。もちろん、物資が足りない、場所がない、など色々な理由があったのだと思います。職員も皆、震災後からずっと働き通しで、ちゃんとした休息も取れないまま、自分自身の生活よりも患者、入居者の生活を優先してきました。そんな限界の状態の中では仕方なかった。そう話せば大抵の人は納得してくれるかもしれませんが。でも、“かたよりや差別がなく、みな等しいこと”はそこに存在していたのでしょうか。平等であることは誰にでも与えられた権利です。その平等の意味を、どうか履き違えないで欲しいと思います。

今回東先生のお話を聞き、大事なことを思い出すことが出来ました。ありがとうございました。